

書評

『コーパス語彙意味論 —— 語から句へ』, マイケル・スタッブズ著, 南出康世・石川慎一郎監訳, 研究社, 2006年

中尾 浩

諸学の情報化が進んでいる。コンピュータを利用することによって新しい学問が生まれたり、新しい研究対象や研究方法が生まれた学問もある。理系の学問に限らず、人文系の学問でも同じだ。中でも言語科学はコンピュータとの関係が最も密接な学問の一つといえるだろう。

言語学においてコーパスはコンピュータが出現する以前から利用されていた。ただし、電子化される以前のコーパスはマイナーな存在であったと言わざるを得ない。しかし、1960年代から電子化された言語データ（≡コーパス）が整備され始めると、言語研究におけるコーパス利用は急速に進展した。当初は機械翻訳や人工知能といったどちらかという工学系、理系寄りの利用が多かったが、最近では人文系の研究者の利用も増えている。

その意味で、本書の著者のスタッブズはかなり純粋な言語学者で、彼の経歴の中に特に理系的な教育を受けたとか研究所にいたといった事実はない。応用言語学、社会言語学等で実績のある研究者だった。もともと理系的なバックグラウンドはないが、コーパス言語学の分野で著名な人物が英国には多い。ジョン・シンクレアやジョフリー・リーチなどもそうである。自らの研究を深める過程において、コンピュータ利用

やデータ利用に進んでいった人たちである。

本書の特徴は専門書でありながら教育的配慮がふんだんになされている点である。私も含めてコーパスをやっている人間はどうしても説明を端折ってしまう傾向がある。論文を書くまでに散々データとにらめっこをしてきているので、どのようなデータや操作なのかといったことが自明のこのように思える錯覚に陥ることがある。

本書はどのようなデータに対してどのような操作をおこない、どのような理論を当てはめるとどのような結論を導くことができるかを丁寧にたどっている。処理内容は基本的にコンコードダンスに基づくコロケーション操作で、さすがにどのようなアプリケーションを用いたとまではいちいち明記していないが、本書で紹介されているような操作が可能なソフトはよほど特殊な処理でなければいくつかのソフトで実現可能である。

日本でも英語や日本語の分野でコーパス言語学の概説書がいくつも出ている。私もいくつか出版したことがある。その中でも本書はあくまで高度な語彙論や意味論の専門書でありながら、コンピュータ利用によって到達しうる地点を示す近年最も重要な成果であると言えよう。